新・下野市風土記

下野薬師寺・国分寺の僧も走ったのか？―「師走」のお話し―

下野市教育委員会　文化課

旧暦・陰暦で一二月のことを「師走」といいますが、師走の語源説として「僧（師）がお経をあげるために、東西を馳せる月」＝「師馳す（しはす）」があります。この説は、意外と古く平安時代末期に編さんされた「色葉字類抄」に記されています。そのほか、「年果つ（としはつ）」、「四季の果てる月」を意味する「四極（しはつ）」、「一年の最後になし終える」意味の「為果つ（しはつ）」とする説などがあるようです。

では、下野薬師寺、下野国分寺・尼寺にはどのようなお坊さん（師）がいたのでしょうか？その前にこれらの寺院はどのような存在だったのでしょうか？多くの方が勘違いされている例が多いのですが、いずれのお寺にもお墓はありません。下野薬師寺についても七三〇年代頃に国営寺院「定額寺」に昇格しますので、下毛野氏一族の菩提を弔う寺以外の役割が大きくなります。下野薬師寺も下野国分寺・尼寺も「国家鎮護」（国の平穏・無事を祈る）のためのお寺として存在します。特に国分寺・尼寺は聖武天皇の発願により全国六十余国に建立された「国中の安泰を願った」寺ですが、国分寺を造らなければならなかった原因として、国中に伝染病が蔓延し、国内の政治は不安定で内乱などが起こり、国外では半島情勢が不穏に満ちていたことがその要因と考えられます。そのような世情の中、全国各地で勤務できるきちんとした資格を有した僧侶の増員が必要となった訳です。よって、天平勝宝六年（七五三）に東大寺に設置された戒壇院のほか、新たに天平宝字五年（七六一）正月二一日の勅命で東国には下野薬師寺、西国は筑紫観世音寺に戒壇が設置されました。この「戒壇」が「僧＝師」となるべき人々の一生を左右する免許試験場であった訳です。概要を説明すると長野県碓氷峠より東の地域の受験生は下野薬師寺で、四国・九州方面で僧になりたい人は観世音寺で受験したわけです。

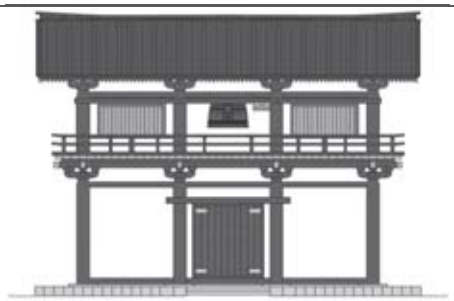
当時の寺院には、現在の総合大学のように文系・理系・医療系・土木系など様々な知識をもった僧侶がいたと考えられます。東大寺の大仏造営に関わったことで著名な「行基」は土木技術に長けており、道を整備したり橋を架けたりしています。時代は違いますが「弘法大師」が井戸を掘った話もつながる訳です。国分寺や尼寺の広い敷地には薬草を植えた「薬園」があったこともわかっており、お寺が病院の役割をしていたことも知られています。ですから合格した後は様々な知識について勉学に励んだと考えられます。試験についてはその性格上、内容について不明な点が多いのですが、下野薬師寺では五人前後の師による口頭試問が行われたと考えられます。ここで合格すると東国の各地の国分寺・尼寺が勤務地となります。国分寺には「講読師」と呼ばれる「教授」がいました。下野の場合、国分寺の講師が薬師寺の講師も兼務した時期もあったようです。現在、下野市には自治医科大学があり、各地から選抜された優秀な人材が最先端の医療について学んでいます。一三〇〇年前の下野薬師寺でも東国各地から選抜された優秀な受験生が集まり、知識を競ったと考えられます。このような人々の地道な研鑽の積み重ねが、歴史と文化となるわけです。下野薬師寺がこの地になければ、後の戦国時代、フランシスコ・ザビエルに「日本国中最も大にして最も有名な坂東のアカデミー（坂東の大学）」と称され、海外にまでその名が伝えられた足利学校は存在しなかったのかもしれません。

用語解説

色葉字類抄……平安時代の辞書、日常語など言葉について記されている。

行基……奈良時代の高僧、日本最初の大僧正、東大寺大仏建立の総責任者

講読師……講師と読師。奈良・平安時代、諸国の国分寺に置かれた僧官で、僧尼を指導し、経論を講説する者を講師、また、これを補佐して法会などをつかさどる者を読師という。



下野国分寺鐘楼推定復元図
当時、下野薬師寺・国分寺・尼寺で除夜の鐘は鳴ったのでしょうか？